

第 1 章

福岡市の歴史文化の特徴

1-1 福岡市の自然、社会、歴史

(1) 自然環境

1) 位置

本市は、福岡県の北西部に位置し、玄界灘、東シナ海を挟んで、朝鮮半島やアジア大陸と近接しています。本市と大韓民国の釜山^{プサン}広域市は直線距離で約210kmに過ぎず、これは本市と広島市との距離（約215km）よりも近い距離です。この地理的な条件は、本市が大陸との交流拠点として独自の歴史・文化を形成するに至った大きな要因といえます。



福岡市とアジアの位置関係

本市が市政を開始した明治22(1889)年当時の市域は、面積5.09km²でした。その後、周辺の町村との合併を繰り返し、昭和50(1975)年の早良町^{ささら}の編入をもっておおむね現在の市域となりました。さらに、海浜の埋め立てによっても市域は拡張し、現在の総面積は343.39km²となっています。

政令指定都市である本市は、7つの行政区（東^{ひがし}、博多^{はかた}、中央^{ちゅうおう}、南^{みなみ}、城南^{じょうなん}、早良^{にし}、西^{せい}）で構成され、北は玄界灘に面し、南は脊振山^{せふりさん}を境に佐賀県に接しています。



福岡市の位置

column : 01

都市発展の歴史 ～博多港と福岡市の発展～

港を中心とする福岡市の自画像

昭和 11 (1936) 年ごろの福岡市の鳥瞰図^{ちやうかんず}は、福岡市が博多湾を包み込むようなダイナミックな構図で描かれています。作者は、大正・昭和時代に活躍した鳥瞰図画家、吉田初三郎^{よしだはつさぶろう} (1884～1955)。博多港を中心に発展する福岡市を細部まで丁寧に描いています。海に開けた都市、それが当時の人々の福岡市のイメージだったのでしょう。

明治・大正の博多港

明治 16 (1883) 年、博多港は特別貿易港に指定され、長崎税関出張所が設置されます。明治 22 (1889) 年には特別輸出港に指定され、米、麦、麦粉、石炭、硫黄の 5 品目を輸出できるようになりました。さらなる発展のため、港湾機能の拡充が必要でしたが、財政面で困難な状況でした。そこで、民間の築港会社が市の補助を受け工事を行いました。資金面の困難から一部の埋め立てにとどまりました。また、福岡市は博多港の振興策として、補助金を出して博釜航路^{はくふ}や大連・旅順^{だいにん りょじゆん}など大陸との航路を開くなどの振興策を図りましたが、大規模な改修はできませんでした。

昭和初期の修築工事

昭和 2 (1927) 年、博多港は港湾の経営に国庫の補助を受けられる第 2 種重要港湾に指定されました。昭和 4 (1929) 年、国と県の補助を

得て博多港修築第 1 期工事が始まりました。工事は西公園下への防波堤建設、船舶航路上の海底の土砂の処分、中央ふ頭と福岡部の埋め立てを行い、昭和 11 (1936) 年に完了しました。最初に紹介した鳥瞰図は、修築工事の完了を記念して製作されたものです。また、同年 3 月から 5 月まで長浜 (現 中央区) 一帯で博多築港記念大博覧会が開催され、160 万人以上の入場者を集めました。

博多港は大陸向けの貿易額を増やしていき、昭和 14 (1939) 年に第 1 種重要港湾に指定されました。

引揚港・博多

第二次世界大戦末期の昭和 20 (1945) 年 6 月 19 日の福岡大空襲により、福岡市の中心部は大きな被害を受けました。終戦後、11 月に博多港には厚生省博多引揚援護局が置かれ、海外にいた軍人、軍関係者と一般人の帰国の窓口となりました。昭和 22 (1947) 年 4 月までに、軍人・軍関係の復員者約 42 万人、一般人の引揚者約 97 万人、合計約 139 万人が博多港に帰国しました。一方で、博多港から朝鮮半島、大陸への帰国者は約 50 万人に上りました。

博多港国際ターミナル前のイベント広場には、博多港引揚記念碑「那の津往還」^{な つ おうかん}があります。平成 8 (1996) 年に建設された、大きな船をイメージしたこのモニュメントは、引揚港であった博多港の歴史を今日に伝えています。



「博多観光鳥瞰図」(原画) 吉田初三郎筆

2) 地勢

●海・島しょ

北に玄界灘と博多湾が広がっており、博多湾は糸島半島や海の中道等に囲まれたおだやかな内湾となっています。その地形的条件から古くより海上交通の要所となってきました。また、博多湾は比較的水深が浅いため、海浜部は昭和 50 年代以降大規模に埋め立てられ、新たな港湾施設やシーサイドももち地区やアイランドシティなどの居住域が形成されています。

沖合には、能古島^{のこのしま}、玄界島、小呂島^{おろのしま}などの島しょがあり、漁業を中心とした生活文化が形成されています。また、砂州^{さす}である海の中道の先端には本土と陸続きとなった志賀島^{しかのしま}が位置しています。

●平野

平野部は、東から糟屋平野^{かすや}、福岡平野、早良平野、糸島平野と呼ばれ、様々な自然の作用により複雑な地形を形成しています。

沿岸部は、海面水位の変動や沿岸流、河川作用などにより、砂州と砂丘が形成されています。最大の砂州である海の中道や、博多湾南岸の砂丘上では、漁業、製塩など海に関連する生業のほか、交易品が集積する港が成立しました。

砂丘の後背に広がる低地部には、阿蘇火山の火砕物が堆積した台地や、河川による氾濫原^{はんらんげん}や段丘などが形成されています。低地部では主に農業が営まれましたが、近代以降は都市化により宅地や商業地へと急速に変化しました。

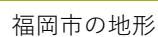
●山・丘陵

東は立花山^{たちばなやま} (367.1m) を頂部とする立花丘陵や四王寺丘陵^{しおうじ}、南から西には油山^{あぶらやま} (597m)、脊振山^{かなやま} (1,054.8m)、金山^{たかすやま} (967.2m)、高祖山^{たかすやま} (416.1m) などが連なる脊振山地が位置しています。林業や狩猟、山間部を利用した農業が営まれるとともに、大規模な山岳寺院も開かれました。

●河川

河川の多くが、脊振山地等と連なる山と丘陵から、北に広がる玄界灘や博多湾に注いでいます。比較的流域の広い河川として、糟屋平野を流れる多々良川^{たたらがわ}、福岡平野の東側を流れる御笠川^{みかさがわ}と西側を流れる那珂川^{なかがわ}、油山を源流とする樋井川^{ひいがわ}、および脊振山・金山・高祖山の山麓から水が集まる室見川^{むろみがわ}が挙げられます。

これらの流域には条里遺構が残されるなど、人々の暮らしと川との歴史的な結びつきを示しています。一方で、河川の堆積により形成された低地部では、洪水氾濫により大規模な災害が発生することもありました。



3) 地質

本市の地質は、三郡：蓮華変成岩類、白亜紀：深成岩類（花崗岩等）のほか、古第三紀（中期始新世～前期漸新世）や第四紀（後期更新世～完新世）の堆積岩類、第四紀の砂丘堆積物などで構成されています。このような石材は、道具や構築物の材料として用いられるほか、姪浜や西新など古第三紀層の分布域では、昭和30年代をピークに炭鉱が営まれ、本市の産業発展のうえで重要な資源となりました。また、花崗岩が風化して形成される良質な粘土は、土器や陶器の材料としても利用されます。海岸部には、国指定天然記念物「長垂山の含紅雲母ペグマタイト岩脈」や「名島の櫓石」など、特異な地質を目視できる場所があります。



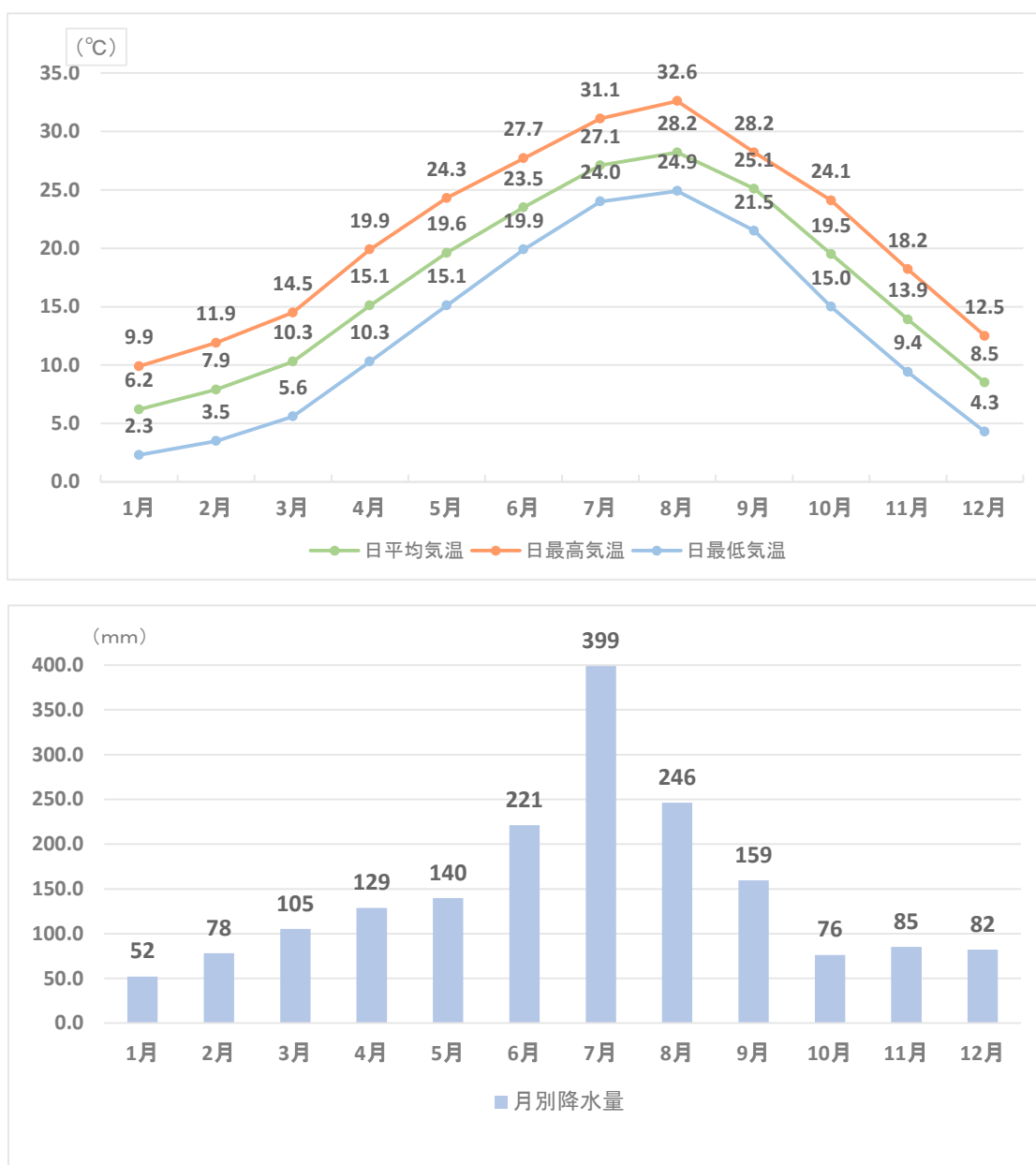
地質図（出典：「HP シームレス地質図：産業技術総合研究所 地質調査総合センター」）

4) 気象

本市は、日本海側に面していますが、比較的温暖な太平洋型気候区に属しており、年間の平均気温は 17.1℃となっています。

夏季は 30℃以上の真夏日が続き、玄界灘を流れる暖流である対馬海流^{つしま}の影響により、冬季でも最低気温が氷点下を下回る日は多くありません。

年間降水量は 1,800 mm程度で、初夏に到来する梅雨の影響で 7 月がピークとなっています。



月別の気温・降水量（平成 15（2003）年～平成 22（2010）年（出典：気象庁 HP）

5) 貴重・希少生物

本市には、森林・河川・農地・沿岸など、様々なタイプの自然があり、多種多様な生態系が存在します。そのような生態系は、本市固有の風土を形成するとともに、市民の生活に恵みをもたらし、市民の経済活動や社会活動を支えてきました。しかし、近年の開発行為や、人間活動の変化や縮小、気候変動等により、生態系の存続に危機をもたらしています。以下に、「市内の貴重・希少生物等のリスト」の概要を示します。

① ほ乳類

イタチ
カヤネズミ
キツネ
スミスネズミ 等



写真：カヤネズミ

⑤ 鳥類

ウチャマセンニュー
カラフトアオアシシギ
クロツラヘラサギ
チュウヒ
ブッポウソウ
ヘラシギ
ヤイロチョウ 等



写真：ブッポウソウ

② は虫類

ジムグリ
シロマダラ
タカチホヘビ
ニホンイシガメ
ニホンスッポン
ヒバカリ 等



写真：ニホンイシガメ

⑥ 昆虫類

キバラハキリバチ
コガタノゲンゴロウ
ツヤハマベエンマムシ
ニッポンハナダカバチ
ハマベウスバカゲロウ 等

③ 両生類

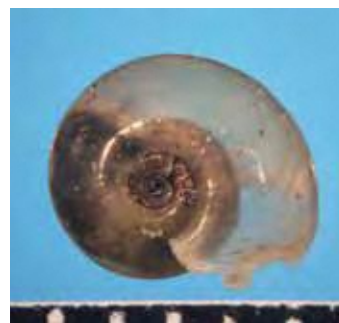
カスミサンショウウオ
トノサマガエル
ニホンアカガエル
ヤマアカガエル 等



写真：カスミサンショウウオ

⑦ 貝類

イチョウシラトリ
イボウミニナ
イリエツボ
オカミミガイ
カワアイ
キヌカツギハマシイノミ
クルマヒラマキ
テリザクラ
ナラビオカミミガイ
マシジミ 等



写真：クルマヒラマキ

④ 魚類

アリアケギバチ
カゼトゲタナゴ
シロウオ
スナヤツメ南方種
ニッポンバラタナゴ
ニホンウナギ
ハカタスジシマドジョウ
メダカ (ミナメダカ) 等



写真：メダカ (ミナメダカ)

⑧ 甲殻類その他

アリアケヤワラガニ
カブトガニ
シオマネキ
ハクセンシオマネキ 等



写真：カブトガニ

⑨ クモ形類等

イソタナグモ
キノボリトタテグモ
ゴホントゲザトウムシ
ドウシグモ

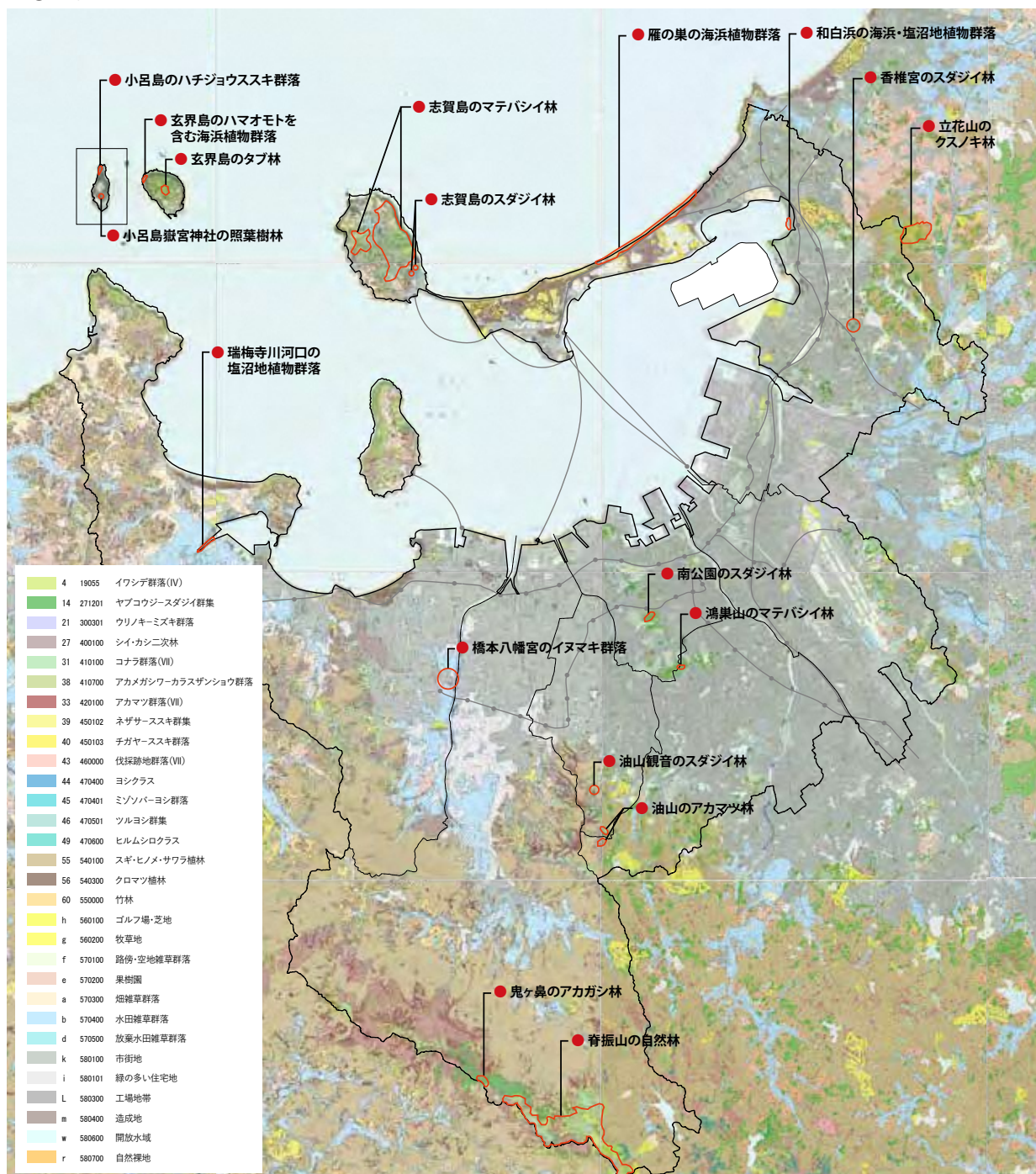
⑩ 植物

イヌセンブリ
ウスギワニグチソウ
オニコナスビ
ツクシオオガヤツリ
ナギラン
ナンゴクデンジソウ
マヤラン
ミズオオバコ 等



写真：ツクシオオガヤツリ

⑪ 植物群落



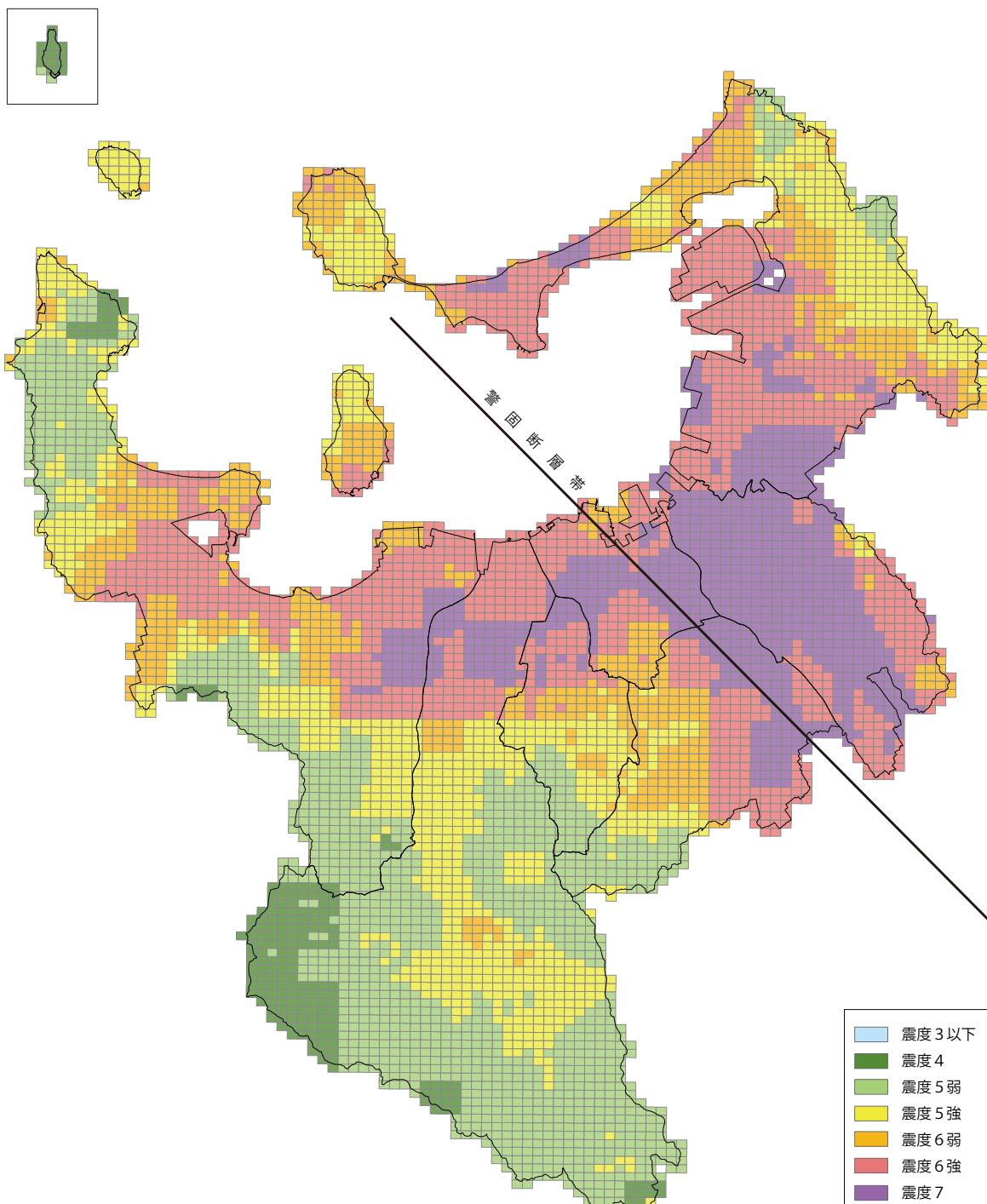
出典：「福岡市環境配慮指針 改定版（平成 28 年 9 月）」

環境省「生物多様性情報システム＞自然環境保全基礎調査＞1/2.5 万現存植生図」より
特定植物群落及び福岡市指定文化財の群落のみ図示

6) 自然災害

近年、想定を超える大規模な自然災害により、全国各地で大きな被害が出ています。本市においても、平成 11（1999）年に発生した福岡水害や、平成 17（2005）年に発生した福岡県西方沖地震では、人的被害のほか文化財にも被害が出ました。

また、本市には、玄界灘から福岡平野にかけて活断層帯である警固断層帯^{けいこ}が走っています。地震調査研究推進本部が公表している長期評価では、30 年以内の地震発生の確率は 0.6 ～ 3.0% とされ、地震が発生した際には、市内の大部分で震度 6 強以上の揺れが予想されています。



想定地震地図（警固断層帯南東部）（出典：J-SHIS Map）